

あさひざ
「旭座人形芝居本公演」(県指定無形民俗文化財)

- 1 日 時 令和4年11月3日(文化の日) 13時30分開演
- 2 場 所 旭座人形芝居会館 八女市黒木町笠原5005-2
- 3 外 題 13時45分～
ことぶきしきさんばそう
「寿式三番叟」(旭座人形芝居保存会)
14時～
けいせいあわなると じゅんれいうた
「傾城阿波鳴門」巡礼歌の段(黒木小学校児童)
14時50分～
つばさかかんのんれいげんき やま だん
「壺坂観音霊験記」山の段(旭座人形芝居保存会)
- 4 観 覧 無 料
- 5 アクセス 九州自動車道 八女ICより約23km、車で約1時間
※駐車場あり
- 6 連絡先 八女市役所 文化振興課文化振興係
☎ 0943-23-1982
- 7 概 要 「旭座人形芝居」は、明治5年(1872)頃、黒木町笠原^{わにばち}八集落に浄瑠璃の名人が現れ、祝いの席で瓢箪や徳利を人形に見立て浄瑠璃にあわせて操ったのが始まりとされます。
昭和30年、福岡県無形文化財の指定に際して保存会を結成し、平成11年に「旭座人形芝居会館」が落成し、座元を中心に旭座人形芝居会館運営委員会で継承しています。また、八女市立黒木小学校でも「人形浄瑠璃クラブ」で伝統を継承し、本公演や笠原まつりで公演を行っています。
- 8 その他 本公演当日に、農産物及びヤマメの直売が行われます。



福岡県指定無形民俗文化財

旭座人形芝居本公演

2022
11/3
祝

公演外題

「寿式三番叟」

旭座人形芝居保存会

「傾城阿波鳴門」巡礼歌の段

黒木小学校人形浄瑠璃クラブ

「壺坂観音霊験記」山の段

旭座人形芝居保存会

13:30
開演
入場無料
自由席

旭座人形芝居保存会について

旭座の起源は、1872（明治5）年ごろ、笠原地区の鱧八集落に浄瑠璃の名人が現れ、祝いの座でひょうたんや徳利を人形に見立てて操ったことに由来します。

以後、九州内の三座から首かしらを譲り受けて芸題を増やし、農閑期には八女茶のPRを兼ねて興業にまわりました。1907（明治40）年に旭日に大鷹をあしらった引幕の寄贈を受け、地名に由来した「鱧八座」から「旭座」と呼ばれるようになりました。1955（昭和30）年に福岡県無形民俗文化財に指定されたことを機に保存会を結成し、継承活動に取り組んでいます。

後援 八女市・八女市教育委員会

会場案内 旭座人形芝居会館

福岡県八女市黒木町笠原5005-2

問合せ先 八女市役所 文化振興課
TEL 0943-23-1982(直通)

※新型コロナウイルスの感染症の予防対策を行って開催しますので、ご協力をお願いいたします。感染状況によっては中止になる場合があります。



「寿式三番叟」

旭座人形芝居保存会

能の「翁」を人形浄瑠璃に取り入れ、景事物として上演する儀式の舞が「寿式三番叟」です。

旭座では、お米やお茶などの収穫に対する五穀豊穡と、息災延命を願い、毎年1月20日の「初光り」と、7月15日の「翁渡し」による「座渡し神事」が継承されています。

右手に神鈴、左手に扇子を持ち、靱蒔きをイメージした躍動感あふれる動きで四方を清めます。黄金の稲穂が垂れるよう篩から次々と靱を蒔きながら、くまなく舞台を駆け回り、皆様のご健勝とご多幸を記念します。

「傾城阿波鳴門」巡礼歌の段

八女市立黒木小学校人形浄瑠璃クラブ

阿波の国・徳島藩で、名刀・国次が何者かに奪われる事件が起きる。藩士・十郎兵衛は、この刀を取り戻すため、盗賊銀十郎として、女房のお弓とともに浪速に住んでいた。その上、夫の十郎兵衛は、今日中に五十両の金子を用立てなければならない事情にあった。

ちょうど、金策で夫が留守のところへ、巡礼姿のかわいらしい女の子がご報酬に訪れる。お弓が身の上を聞くと、国は阿波の徳島、父の名は十郎兵衛、母はお弓と答えた。それは紛れもないわが娘、お鶴だったのだ。

お弓は娘に災いが及ぶことをおそれ、母と名乗りたい気持ちをぐっところえるが、お鶴は「小さい時に別れて親の顔もはっきりと覚えがなく、よその子たちのように、母さんに髪を結ってもらいたい」と泣き出してしまふ。お弓も涙をこぼしながら、お鶴の身を案じ、徳島へ帰るように諭す。そんなお弓に、「あなたが母さんのように思えてきました。何でもしますからここに置いてください」とお鶴は懇願するが、置いてやることはできない。お弓が帰りの旅費を渡そうとすると、お鶴は小判を持っているので心配ないと告げる。わが娘のいじらしさに打たれ、自分の髪で髪を結び直し、泣く泣くお鶴を送りだしたお弓。しかし、このままでは二度と会えないと、連れ戻す決心をしてお鶴の後を追いかけていくのだった。



原作者未詳の『観音霊場記』に、2世豊沢団平・加古千賀夫妻が加筆・作曲し、1879年に大阪大江橋席にて初演された。

(あらすじ)

大和国・壺坂に住む盲目の沢市は、女房のお里の内職を助けにつつましく暮らしていた。お里が毎日明け方に家を空けることに気付いた沢市は、女房が間男と不義をはたらいているのではないかと疑いを持ち、お里を問い詰める。驚いたお里は、夫の目が見えるようにと、每晚裸足で観音様にお参りし3年になるのだと打ち明けたのだった。これを聞いた沢市は涙を流し、貞節な妻を疑ったことを詫言、二人で観音様へ参詣することにした。

(公演ここから)

観音堂へ着いて御詠歌を上げたあと、沢市はここで三日間断食をするので、お前は家に残り用事を片づけてくるようにと言う。沢市の信心を喜んだお里は、お堂の左手は深い谷になっているので、決してここから動かぬように、と言っておいて家に帰っていった。

一人になった沢市はどっと泣き伏した。お里には苦勞ばかりかける上、3年も信心してくれたのに何のご利益も現れない。自分がないほうがお里のためになる、と思った沢市は、お堂を出ると深い谷へ身を投げてしまふ。

胸騒ぎを感じて引き返してきたお里が、沢市を呼べどもどこにも姿がない。お堂を出て捜しまわると見覚えのある杖が。ハッと驚き谷底を見ると、月明りの下に夫が倒れているのが見えた。ああ、夫は死ぬ覚悟であったのか、そうとは知らずここまで連れてきてしまった、と歎き悲しむお里。盲目の夫があのお世で迷わないようにと、後を追って谷に身を投げるのだった。

すると観音様が現れ、お里の貞節と信心をたたえ、二人を生き返らせた。目が覚めた二人は、沢市の目が見えることに気付くと、観音様のおかげだとお礼を言い、踊りあって喜ぶのだった。



数百ある人形浄瑠璃の外題はほとんどが悲劇で、ハッピーエンドは3つしかないと言われています。奈良の壺坂寺は今でも眼病封じの霊場として有名です。